

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2018

「豊かに生きる ～大学は知の宝庫～」

第1回 10/1 (月) 13:30～15:00 報告

思い出のうた ～童謡・唱歌の世界～

講師 内田恵美子 (本学講師)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

平成30年度第1回公開講座(受講者38名)が10月1日に開催されました。短期大学部幼児教育学科講師の内田恵美子先生による「思い出のうた ～童謡・唱歌の世界～」と題された講演でした。

まず第一に、童謡の歴史が話されました。1918年7月1日に日本に童謡が誕生し、今年には童謡が誕生して100年となる記念の年です。子どもの歌の分類は、江戸時代はわらべうたと言われており、明治時代から大正時代初期はわらべうたと唱歌とされていました。明治4年(1871年)に文部省が設置され、明治5年には学制がしかれ、子どもは学校に通うようになり、明治14年から科目として音楽が設けられました。大正時代初期以降は、童謡が設定され、童謡は「子どもにむけて芸術的香気の高い歌謡」と定義づけられ、創作童謡と芸術童謡に分類されました。昭和に入ると、児童文学雑誌は不振となり、昭和4年(1929年)に『赤い鳥』が廃刊となりました。第二次世界大戦前や戦時中は、戦時童謡が多く作られました。第二次世界大戦後は、第一次ベビーブームがあり、子どもの歌が必要とされ、「童謡復興運動」がおこり、多くの童謡が生まれました。戦後から平成にかけて、テレビやアニメの主題歌など多様な子どもの歌が存在するようになりました。

第二に、大正時代の童謡の転換期について話されました。鈴木三重吉は、大正5年(1915年)に、童話集『湖水の女』をきっかけに、児童文学作品を手がけるようになりました。大正6年(1916年)には、児童文学雑誌『赤い鳥』を発刊し、芸術として真価のある、子どもの歌と詩を子どものために創りたいという願いを拡張し、児童文学運動を展開しました。これは童謡の黄金時代と言われています。

第三に、童謡界の三大詩人(西條八十、野口雨情、北原白秋)について話されました。童謡の第1号は、「カナリヤ」という歌で、西條八十が作詞し、成田為三が作曲しました。「カナリヤ」の詩は、①西條八十の生育歴、②配偶者の支え、③鈴木三重吉のサポートを基盤として作詞されたものと分析されました。曲はヨナ抜きメロディーと、西洋のノスタルジックが特徴となっています。次に、野口雨情については、児童文学雑誌『金の塔』に詩を発表し、仏教音楽の研究をもとにして、「しゃぼん玉」を作詞しました。詩には明治41年(1908年)に初めての子どもの生後8日で亡くした経験から、人間のはかない生命を喩えて書いたものと分析されました。最後に、北原白秋については、大正15年(1926年)に児童文学雑誌『赤い鳥』に「この道」という詩を掲載しました。大正16年(1927

年)に山田耕筰により曲がつけられましたが、「この道」は北原白秋の北海道旅行の思い出が込められていると分析されました。北原白秋は「真に子どもの核心に触れた芸術的童謡一、児童は児童なりの直観によって、或程度の深さまで、その芸術的内容をかなりの確に感知できる」と書いていました。

第1回公開講座の終わりに、質疑応答の時間が設けられましたが、受講者から質問はありませんでした。受講者にとっては、大学の公開講座に対して、童謡の社会的、文化的歴史や楽曲の分析において、いっそう専門的な知識が得られると期待していたかもしれません。

【講座の様子】

